

南へ、東へ

2002年『南へ、東へ』(現代アーティストセンター)展テキスト

私達の暮らしている横須賀と沖縄で、それぞれの書いた電子メールが行き交う時、メール文書は遥かに海上を越え、南へ、東へと届けられる。サン＝テグジュペリが飛行機で郵便を運んだ時代から考えると、それはあまりにあっけないことではあるが、時々私は自分の書いたメッセージが、柔らかな緑に包まれた山々や、藍色に白い波模様の海上を、低く高速度で飛んでいく時の視界をイメージしてみる。すると普段は自明だと思っていた、それぞれの土地の磁場が密かに働いている様子が、見える気がするのだ。

私は偶然に横須賀に住み、知花君は生まれ育った沖縄に住んでいる。二人が交錯したのは、大学院での2年間だけなのだが、二人とも現代美術と言われるものに首を突っ込み、日本という島国でヨーロッパやアメリカから発せられた思想や表現に、容赦なく翻弄された。それは時にとっても理不尽なことのようには思えたが、とにかく二人は絵画という共通の興味から同じ船に乗り合わせた。それから20年近く経ったが、正直なところ二人の描く絵画が、豊かな可能性の沃野にあるというわけではない。それは、世界が単純な対立から解放されても、依然としていたる所に不幸な戦争が蔓延しているという構図にも似て、一筋縄ではいかない問題のようだ。しかし、だからこそ絵画について考えることが、偏狭な芸術の一分野という限界を越えて意味があるとも言えるし、可能性の貧しさもまた、根拠のない幻想として乗り越えられるべきものなのだと思う。

電子メールでそんなことをやりとりしながら、お互いにどこへ行こうとしているのか、あるいはどこに留まろうとしているのか、確認してみるのもいいのじゃないか、ということになった。現代の情報化社会にあって、二人を分かつさやかな距離や時間など、ほとんど無化されている。しかし例えば、偶然にも米軍基地が身近にある場所に暮らす二人のメールが、しばしば共通の話題としてその周辺のことを語りながら、微妙に観点の違う言葉を紡いでいることも事実。それぞれの土地が抱えた矛盾やねじれ、それに関わるときの立場や資質の差異。それらが日常的な言葉の中で透けて見える。

芸術表現が安易に日常的な差異を反映するとは考えないが、だからこそ何が確認できるのか、見てみたい。

南へ、東へ、これからも幾度か電子メールが飛び交い、最後には生身の作品が出会うことになる。